

北の教養選書 1

アイヌ
の文学
ユカラへの招待

萩中
美枝
著



萩中美枝 著

アイヌ
学 ユーカラへの招待

北の教養選書 1

アイヌの文学

ユーカラへの招待

一、五〇〇円

印刷 昭和五十五年七月二十五日

発行 昭和五十五年七月三十一日

著者 萩中美枝

発行者 野沢信義

発行所 北海道出版企画センター

〒〇六〇 札幌市中央区北三西三ノ会館四階

電話(〇一一)三三一七二〇 振替小樽二六七七

取引銀行 北海道拓殖銀行本店

印刷所 協業組合高速印刷センター

乱丁・落丁はおとりかえいたしません。

0393-6001-7817

——
故 八重九郎さんのためにこの本を——

序——ユーカラへの招待をお受けする

大林 太良

萩中美枝さんが今まで、いろいろな機会に発表されてこられたユーカラ関係の文章が一冊の本にまとめられることになった。嬉しいニュースである。

萩中さんは、亡くなった夫君の知里真志保さんの後をついで、長年アイヌの伝統的文化の研究を進めてきた。広く各地において調査をつづけ、ことに故八重九郎さんというすぐれた伝承者の信頼を得、いろいろ学んでいき、萩中さんのアイヌ文化への理解は深まってきた。萩中さんはこれにユーカラについて造詣が深く、その分類などについても、すぐれた考えを提出しているし、また個々の詞曲についてもキメのこまかい理解と鑑賞を示している。

ユーカラとは何であるかは、さまざまな立場から規定することができよう。またユーカラのもつ多様な側面は、どの側面に注目するかによって、いろいろな規定をするのを許している。現在、私の頭にあるのは、ユーカラはアイヌの古典文学であるという規定である。しかし、ユーカラは文字によって伝えられてきたものでなく、口承によって伝えられてきたものである。だから伝承の

古典と言ったほうが正確かも知れない。

ところで、ある民族にとつての古典とは何であるかという、それは何よりもその民族のアイデンティティーのより所である。すぐれた古典をもつことによって、その民族は自らの文化的伝統に誇りをもつことができる。また、古典はそれを生み出した民族の心を映す鏡である。その民族の思考様式の原型がそこに潜んでいるのである。

このような意味において、ユーカラはアイヌの人たちにとって大変重要な意義をもっている。また私たちにとつてもアイヌ文化を理解するための重要な鍵である。いま萩中さんがこのユーカラの世界に招待して下さるという。私もよろこんで、この招待をお受けしたい。

目

次

序——ユーカラへの招待をお受けする……………東京大学教授
大林 太良……………二

はじめに……………二

ユーカラへのアプローチ……………一四

神々のユーカラ……………二〇

国の神——火の神……………二五

村の神——しまふくろう……………三〇

山の王——熊……………三七

沖の王——しゃち……………四三

しくじった神々……………四五

アイヌの始祖神、巨人……………五五

折返し……………六〇

人間のユーカラ……………七四

語り部ユーカラクル	七四
物語の展開	七八
八重さんのサコロベ	八三
ヒーローの住む城と地名	一一三
ユーカラの現状	一二五
その他の叙事文学	一二九
八重さんを偲んで	一三七
析詞	一四〇
説話	一四七
民族誌ノート	一五四
おわりに	一八二

アイヌの文学

ユーカラへの招待

はじめに

千歳と大阪をむすぶ飛行機便の名がユーカラ、米にもユーカラという銘柄があるほか、ユーカラ座、ユーカラ彫りなどという名称もある。まちをあるくとユーカラというバーやレストランも目につく。だが、ほんとうの意味を知っているひとは、どれほどいるだろう。

アイヌの芝居だと思っているひとも多いし、歌や踊りだというひともいる。先日も「ユーカラってきれいなものですね」といわれてにつこりしたとたん「どうしてあんな模様が生まれたのかなあ——」

これが札幌生まれの札幌育ちで、札幌の大学を出た若者なのだからおどろく。

ユーカラは、すべて口碑伝承による。口伝えといっても一語一句同じ、というものはなく、同じ伝承者でも、同じユーカラを年数を経て語るときは、かなり変形している。継承したときのユーカラと、伝承者自身のユーカラとの違いは、回を重ねる毎に幅が広がり、物語の筋合と常套句をのぞいて全く別なものを聞いているように感じることもある。伝承者の人柄も加味され、文芸的に発達していく。私がユーカラをアイヌの文学だというとなえ方をしているのはそのせいである。

ユーカラは、アイヌの教訓である、と定義する人もいるが、さまざまな教えが盛り込まれているのも事実である。自然を相手に生活していた時代には、今日では想像もつかないほどの災難に合うこともある。そんなときにはシャーマンが神意を伺って事に当るならわしがあつて、その託宣の言葉のうち、とくに人々の心をうつたものが消えずに残され、巫謡からユーカラへと発達した。

教訓も、伝説も、歴史上の事件も含まれているユーカラ。どこまでが神話で、どこからが文芸作品か、それらが混然一体となつて口から口へと語り継がれた。

ユーカラは、神が、あるいは人間が「私は……私は……」と、ヤイエユカラ（自分を物語る）する叙事詩である。人間といつてもユーカラのヒーローになるほどのひとは巫術にすぐれていて、天をかけめぐり、地にもぐつたりして、どんな神など、いっぺんにやつつけられてしまう。

アイヌの神々もまた多様で、アイヌにとつて重要な神もいれば、ひょうきんな神もいる。ハンサムなアイヌを水辺に誘う美しい魔女も神とよぶ。釧路の八重九郎さんは、「鶴には近寄るな」といつていた。鶴の仲間には悪知恵の発達したものがいて「お前なんか、すぐにだまされてしまう」そうだ。ポンオタストウンクル（人間のユーカラのヒーロー）でさえ、うつくしい娘に姿を変えた鶴に誘惑されそうになつた物語を伝承していたからだつた。

八重さんでなくてもユーカラの伝承者は、いつでもユーカラの世界にあそび、神々と共に生きている。そんなお人柄にふれると、ひとりで、あたためているのがもったいなくて、少しずつ発表してきた。それを河野本道さんが整理して一冊にまとめてくれた。

もとより浅学の私、書き足りないところばかり目につくが、まず踏み台に、とおもって目をつぶることにした。それに、八重さんのためにも早く出したかった。八重さんはユーカラという名称だけが有名になり、本質を違えて解されているのを人一倍さびしがって、怠け者の私の尻をたたいて書かせたのだった。

大林太良先生には、たびたび発表の場をつくっていただき、ご教示を賜ってきた。この本にも、私には身にあまるほどの序文をちようだいしたが、励ましの思し召しだと受取り、これからは、もう少し身を入れて勉強したいと思っている。

たくさんの方々のご厚意でこの本はでき上った。

ユーカラへのアプローチ

かつて、アイヌの社会にシャーマニズムが生きていた頃は、トウスロセ（巫術）を行なう習慣があった。

そのとき、巫者は神がかりの状態に入って、神意を告げるのだが、この託宣の言葉は、本来はその場かぎりで消えてしまう。しかし、とくに人々の心をうつたものが口から口へ語りつがれていった。内容がすぐれているもの、信仰や行事に関連のあるものなどが残され、伝承された。それをトウスシノッチャ *tusu-shnotcha*（巫謡）という。

次にあげたのは、胆振の幌別（いぼり）に伝承されていたもので、村長（むらおき）の妻が病氣にかかり、その原因をさぐるために巫術を行ったときの巫謡の一部である。巫者にのりうつっているのは、病氣になった女のつき神の竜蛇であった。